

教 仏 名 聞

第43号
(発行日)

2014年4月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日午後6時30分始。

* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

彌 陀 の 名 号 称 え つ つ

今回から、法話風に書いてみたいと思います。

弥陀の名号となえつつ

信心まことにうるひとは

憶念の心つねにして

仏恩報ずるおもいあり

(念仏を称えつつ、この念仏を選びとられた仏の本願のまことを疑いなく信ずる人は、

つねに心に本願を忘れずに、仏恩を感謝する思いが持続する)

誓願不思議をうたがいて

御名を称する往生は

宮殿のうちに五百歳

むなしくすぐとぞときたま

う

(名号は仏の誓願であるのに、その誓願の他力を疑って、自力で念仏している者は、浄土の辺地・胎宮に生まれて、五百歳の間意味のない年時を過ぎす、と大経に説き給う)

まず最初の御和讃について

お話しいたします。

「弥陀の名号称えつつ」ですが、ここに、浄土真宗の教えにであって念仏聞法する人

の、基本的な生活が教えられています。それは「弥陀の名号を称えつつ」日々を送る、一生を送るとい

ことです。法然聖人・親鸞聖人の生涯の基本は、専修念仏です。すなわち専ら称名念仏を修する生活です。称名念仏とは「ナムアマダブツ」と阿彌陀仏の名号(名)を口で称える行いのことです。

仏様でない限り、人生に悩みのない人はいないと思えます。しかし、その悩みをどう

かして解決したい、道を見出したい、助かりたいと真剣に願う人は多くはなく、次々と起こる悩みや苦しみをその場限りの対策とか気晴らしなどで一時的に散らしながら、一生を終えていく人は少なくありません。

けれども(悩み)は、無意味ではなくて、「汝の苦しみを根本的に解決すべく真実を求めよ」「あるべき状態へおもむいて行け」との大事なご

催促(ご縁)であるといえま

ていくだけではもつたいないことです。

むしろ苦しいことや悲しいことやうつとうしい事柄が起こるのを、それを仏法の縁とさせていただく。仏(釈尊)

様が説かれた真実(法)を聞き開く大事な縁と受けとつて、お念仏申させていただくのであります。すなわち煩悩の起るその時その都度「南無阿彌陀仏と称える」のです。理屈はアトでいいので

困ったこともみな御縁 南無阿彌陀仏にあう御縁

と詠っておられます。苦しみや悲しみは南無阿彌陀仏という真実にあうご縁です。「あう」とは先ずはナムアマダブツと称えることで、難しいことではありません。直ぐにはまことの真実(阿彌陀仏)にであうというわけにはなかなかいかないでしょうが、一声でも称え聞く処に、「真実にあう」ことが成就する場にいるといえます。

勿論、苦しみを本当に解決したいと思つて坐禅をする人もありましょう。あるいは心理療法を受ける人もありまし

今回から聖人の『三帖和讃』を縁としてお話ししたいと思

います。まず『浄土和讃』の最初に「冠頭和讃」と呼ばれている二首の和讃があり、これは『三帖和讃』全体の序分の意味を持つといわれています。

それは次の二首です。

(なお口語訳は岩波文庫「親鸞和讃集」(名畑応順校注)を参考にしました)

よう。あるいはキリスト教に入って神に祈る人もありません。念仏だけしかないなどとは申しませんが、称名念仏は易行といいますが、だれでもどこでもいつでも行うことができる「行」であり道なのです。

ただ苦しみに遭ってどうかしたい時、「神仏に祈る」とよくいいますが、それがともすれば、悩みの解決を求めて、自分の都合良くなるようにと神や仏やお地藏さんなどに祈ることがよくあります。

病気になるって苦しいときに「病気が治りますように」とか、「お金に困っているときに」「商売が繁盛しますように」、給料が上がりますように」とか、子供の受験に不安を覚えるときに「受験がパスしますように」というような「祈り」は、とかく自分の願望、もつといえれば自己中心的な欲望を叶えて貰いたいという心情が伴っています。これが元になっ

ています。ですからたとえ自分の思い通りになっても、自分の思い通りにしたい、欲求を叶えたいという自我的な欲求は少しも減じていないばかりか、ますます自己中心的なハカライが強くなっていきました。

そして逆に自分の思い通りにいかない時は、不足不満で自分が苦しいばかりか、邪魔した人を憎んだり、怨んだりしてしまいます。又思い通りになつていい目をしている人をねたんだり、うらやましがったりして心穏やかではありません。

話は少し変わりますが、へあなりたいこうなりたい」という自分の欲求が、どこでかさまっていくかを考えてみると思えます。

多くの場合は、外に求めます。家が欲しい、車が欲しいという欲求は、家を手に入れ車を手に入れるとおさまりましょうから、それらを自分の心の外に求めようとしません。これは、思いど通りに手に入ると満たされませんが、手に入らない場合は欲求不満がつつてきます。ですから、散外に満足を求める場合は、散

髪屋さんの看板のように青色と赤色がいつまでも交互に混じるように、楽が来たり苦が来たりで、苦楽変転がいつまでも続いて落ち着きがありません。いわゆる流転するばかりです。

次に「これではいつまでも禍福の状況に振り回されるばかりである」と反省して、なんとかこうした苦楽を超えた安らぎがないだろうかと思つて、仏教の教えなどに救いを求めるようになる場合があります。そして、苦楽の元にあるのは我欲だと知つて、自分の欲求を減らしていく、いわば「欲を少なくしていく生活」をこころざすようになる場合があります。これは真面目な生き方だと思います。

しかし、欲を少なくしようとすればするほど、我欲が深く離れたい自分であると逆に知らされてくるのであります。我欲が離れられないという事は、欲求不満である怒りが離れられないということ、我欲の表である貪欲と、裏である瞋（いかり）、いわゆる貪瞋の煩惱がどこまでもつきまとつてくることを知らされます。こうして貪瞋の

煩惱が自分の心の内容であると次第に知らされてきます。親鸞聖人も九歳から二十九歳までの二十年間、天台宗の修行僧として比叡山で修行をされていた時は、なんとか貪瞋の煩惱を離れたいと願つて戒律を保ち、坐禅をし、仏教の学問をされたのですが、仏

のさとの境地に近づこう、煩惱を浄化しよう、と励めば励むほど、自分の心の中の煩惱が盛んであることを知らされ、またそれを少しも始末することができないという壁にぶつかられたのであります。いわば一番身近な自分の心に困り果てられたのです。

ここは大事なところですが、浄土真宗の教えを聞いても分からないとか、お念仏が有難いとは思えないという声をよく聞きますが、それは浄土真宗の教えが難解だからでもなく、またお念仏の意味が難しいからではなくて、自分の心でありながら、その心がどうにもならないという極めて身近な問題にぶつかつていないからと言えます。自分の心を問題にしていけないからです。

本当は人生の何に困つていいのかと尋ねていけば一番自分を悩ませ困らせているのはあにはからんや自分自身の心であります。

手に入れた物が手に入らなくて不足不満がたまるのは、欲しい物が手に入らなかつたからというよりもむしろ、どこまでも手に入れないという欲求が苦しみの一歩の因なのであります。へあんな人と一緒なのはイヤだ」と悩む時、困るのは嫌な相手がいるということも苦しみの縁ではあります。一番自分を困らせている原因はその人を嫌がる自分の心に困っているのであります。

こうして、自分の心ほど自分を悩ませているものはない。にもかかわらずその心を始末することもコントロールできない。いつまでたつてもできない。こういう問題に比叡山にいた頃の聖人は悩まれたのであります。

この問題は決して八〇〇年前の聖人だけの問題ではありません。実は何時代のどんな人にもある問題であります。しかし、こんな大事な問題がありながら、それを問題

化せず（時の流れに身を任せ）ではありませんが、ほつたらかしたまま年月が経ち、死に際になったときはすでに（時間切れ）で、解決する時を失ってしまうことが多いのです。

聖人は、浅ましい煩惱だらけの自分の心を自分で変えることが出来ないことにぶつかって、とうとう天台宗の修行を捨てて法然聖人の教えを聞かれるようになったのです。それが二十九歳の時です。

そして法然聖人から阿弥陀仏の念仏往生の本願を聞かれ念仏申す身になられたのです。

阿弥陀仏の本願の仰せ（第十八願の思し召し）は、「貪瞋煩惱の汝よ、その煩惱はお前の力ではどうにもならない。その煩惱の心は私の方で浄化して仏にするから、我が名を称えよ、それだけでいい」との阿弥陀仏の大悲の誓いです。

私たちもこの本願の思し召しを我が身の救いとして聞かせていただくのであります。阿弥陀仏の第十八願が説かれた『仏説無量寿経』には、第十八願文に

「乃至十念・若不生者・不取正覺」（十念なりとも我が名を称えよ、もし汝が浄土に生まれぬようなら、この法蔵菩薩も仏には成らない）とあります。

この如来法蔵様のお誓いを聞かせていただく時、南無阿弥陀仏とおのずからお念仏が申されてくるのであります。

こうしてお念仏の人生生活が始まります。「弥陀の名号が始まります。この一行を生涯たもつのです。真宗門徒の日々の実践は、念仏の一行を行います。それを継続する生活であります。極めて具体的であり実践的であります。行とは「おこない」であって、観念や思想ではありません。そうするとおのずから自分の耳に（ナムアミダブツ）と聞こえます。これがまた至極大事なことなのです。

お念仏の声は言葉であり、声であり、音であり、響きであり、響き。これは思いかか妄想とか幻想とか、こうした心のさまざまな想念を超えています。お念仏は私たちの思いや心を超えている行で、このことは大事なことです。耳に聞こえてくる音声が、お

念仏の実際のすがたであり、ここに阿弥陀仏の大悲のお心を知らせていただくのが真宗念仏の特色です。

お念仏は易行易行の道ですよ、と親鸞聖人はお勧め下さっています。易行といふのは、行き易い道ということ、お念仏を申す道はだれでもが歩むことのできる道です。また易行といふは、だれでもがたやすく行うことのできる行であります。この易行易行の道に入ると浄土の門に入っていることになり、それを「浄土門の徒」いわば門徒といいますが、

真宗の家に縁があっても、お念仏を申さないなら真宗門徒とは名ばかりで実が伴わないのであります。いわんやお念仏も申さず、神仏に自分の願望を叶えようと祈願したり、日の良し悪しや方角を見たり、占いに頼ったりしてゐるなら真宗門徒の生活からはずれているのであります。

さて念佛申すようになりますと、救いは既に身近に与えられていと言えます。ここがまた大事な点です。お念仏を申して、それをだ

んだん積み上げていつか未来に阿弥陀様の救いにあずかるのだと考えると、真宗の本義からそれてしまいます。このところは間違いやすいので、よくよく聞かねばなりません。

お念仏を称え始めて、まだ先にお救いがあるのだと思いがちですか、そうではないのです。称えるお念仏の今の一声に、すでに救いが来て救いが告げられているのです。仏の喚び声、それが称えている現在のお念仏の声なのです。「汝のありのままを引き受ける」「助ける」の仏さまのお声なのです。ですからお念仏は私の行いではなくて、阿弥陀仏が私の口を通して行って下さっている行（はたらき）なのだ、聖人は教えて下さいます。いわゆる「大行」だと。

救いは既に今ここに来ているのですが、それを知らない私たち。そんな私たちに救いが今ここに来ていると告げ知らせ下さるお声、私の口から出て下さるお念仏の声なのであります。

もう一ついえば、一切衆生の救いは今ここに既に来ているのです。しかしそれに気が

つかずに流転してきたのです。無宗教の人であろうと天理教の人であろうと、イスラム教の人であろうと、赤ちゃんであろうと老人であらうと、善人であらうと悪人であらうと、生きとし生ける者のいるところ、そこにすでに阿弥陀仏が共にいて下さり、「そのままなりで助ける」と、救いを告げつつあるのです。ただそれを知らずに流転を重ねてきたのです。

阿弥陀仏の告げ知らせるお声が具体化したのがお念仏によつて阿弥陀仏の告知が極めて身近に具体化するのであります。

お念仏を称える、その一声のところ、救いは表現されているのです。お念仏を申すということは、ただごとではなくて、驚くべき幸せに寄り添われていくことになりま

（了）



木村無相さんの法信⑬

(昭和五十八年七月二十三日の木村無相さんから私へのお手紙の続きです)

紀さん、

ワレワレの実機、自性、本性というものは、まことに「悪衆生、邪見、無信の者」で、時には、ありがたいとか、うれしいとか思うことがあっても、その実は、「ナントモナイ」のが我れ々々の本性、自性なのであるから、そのために、如来法蔵さまが、五兆の御苦勞で念仏往生、南無阿弥陀仏を御成就下されたのであるから、この「ナントモナイ」機のホカに、「ナムアマミダブツ」をオサメルところが無いのである。如来は、「ナムアマミダブツ」の念仏として、この「ナントモナイ」機のワレワレのムネにクチにナムアマミダブツナムアマミダブツと、思い浮かび、称えあらわれてイヤでもオウでも、この「ナントモナイ」機の我々をして「念仏」申し、往生ししめずば、止まないのである。我等の「生死出離」を、「ナムアマミダブツ、ナムアマミダブツ」と、決定せしめずには止まないものである。

○ それゆえ庄松は、『正信念佛偈』のあと

ナントモナイ、ナントモナイと我等が機をツブヤキ、この機は「念佛」よりホカに「出離の縁」あることないゆえに、「念佛」の声がありがたかったと

正味の一番大切な大説教を言ったのである。

○ そこで、我等の「ナントモナイ」機、

マルキリ出離については「ダメナ機」、「アカン機」は、凡夫の心では、わからず、お念佛にふくまれてる真実信心、ナムアマミダブツによって、思い知らされたのであるから、「ナントモナイ」機と、「マルキリダメナ」機、「アカン機」と、如来の信心、念仏とは、ハナレテイナイ、如来回向の念仏にふくまれてる信心によつて、「ナントモナイ」機と思い知らされたのであるから、

「ナントモナイ」機と思い知らされたら、その上に別に、信心とか、念仏とかを持つて来なくて、ただ「ナントモナイ」心を思い知らされただけでいいのである。

○

ただ「ナントモナイ」心のまんま、ただ「ナムマンダブツ、ナンマンダブツ」のホカはないのである。

○ そのこと、又、浄教寺は、次の如くオサトシ下されている。(信者めぐり、352ページ)

アカヌ機(ナントモナイ機)をアカヌ機と、知らされたのも、法から知らされたのじゃ。だから、「アカヌ一つ」(ナントモナイ一つ)が思い知らされたら、

その場へオヤ(如来)を出さずとも、アカヌ機ぞよ(ナントモナイ機である)と知らされた一つの中に、アカヌ機(ナントモナイ機)も、マカセル法も、アカセル法も一つに二つが満足して居る。

○ それで、「ナントモナイ機」「ナントモナイ心」と知れたら何とかしようとする必要はさらさらないのであるから、紀さんが「何ともない心をなんとかしよう」と、しようとも思えずして、何も心そのままにナムアマミダブツ、ナムアマミダブツと歩ませていただく」という、それよいのであります。

○ そうであつてこそ「本願相応のお念佛」であり、ワレ々々凡愚としては、これよりホカに生きよう、歩みようがないのです。そういう生き方を「ただ念佛」という。

○ これだけにします。つかれました。またアリノママをオタヨリ下さい。アリノママが一番いいです。眞由実さんによるしく

○ 明廿四日(日)朝、ラジオ放送を聞き

ます。

ナムアマミダブツ ナムアマミダブツ 合掌

《住職遠方法話日程》

四月九日。愛知県稲沢市。岩本様宅

四月十三日～十四日。広島市内。龍善寺様

五月十四日。名古屋市内。谷口様宅

五月十九日～二十一日。福井市内。福井別院

六月十日。京都東本願寺の北。大谷婦人会館

七月十四日～十五日。石川県穴水町。清琳寺様

十月十五日。名古屋市内。坪井様宅

十一月十七日～十九日。福井市内。福井別院

十一月二十三日から二十四日。金沢市内。名聲寺様

十二月十三日～十四日。姫路市内。西源寺様

○ *福井別院は申し込めば泊まれます。

○ 詳しい情報は念佛寺の方にお尋ね下さい。

《念佛寺永代経法要》

四月二十二日(火)午後二時始

講師 藤本千穂美師

*同日(四月二十二日)午前十時・勤行法話(念佛寺住職)